

06. null²-シグネチャーパビリオン(落合陽一) 基本設計:NOIZ 実施設計:フジタ,大和リース 施工:フジタ,大和リース



メディアアーティスト 落合陽一のプロデュースによる本作は、太陽工業と共同開発した金属と樹脂を配分した新素材「ミラー膜」を外装に用い、その表現を二つの形式で展開している。ひとつは中央に大きな曲面開口をもつ「ホルン型」であり、鑑賞者の視点移動に応じて風景の映り込みが流動的に歪み、常に異なる風景を映す。もうひとつは「平面型」で、内部に組み込まれたロボットアームやスピーカーの作動によって表面が波打ち、鏡面が呼吸するかのように揺らぎ続ける。

内部は全面を鏡貼りとした大空間に LED ディスプレイを組み合わせた「ミラールーム」となり、来訪者は自身の分身＝ミラーボディとの対話を通じて、自らの存在と時間の感覚を再認識するよう構成されている。その根底にあるコンセプトは「命を磨く」であり、鏡という古来の装置を再発明し、訪れる者に「自己との遭遇」という根源的な体験を与える。

外装の動的なファサードと、内部の没入的な空間演出は、ともに来場者の思考を直接触発する構成を備える。さらに、万博特有の制約である、多数の来場者を限られた空間で受け入れるという課題に対しても応答しており、待機列を設けずとも外観そのものが通行者すべてに問いかける風景を形成している。その結果、外観体験だけでも十分な充足を与えると同時に、内部空間においては通り抜け型のウォークスルーによる短時間での感覚的体験が組み込まれている。

このように本作は、万博建築における理念提示と実地的な運用とを高い次元で両立させており、建築として優れていると感じた。

小林